

東大寺諷誦文稿注釈〔二〕

— 41行～79行 —

小林 真由美

凡例

【影印】

昭和十四年刊複製『華嚴文義要決 東大寺諷誦文稿』の「東大寺諷誦文稿」を撮影した。上部に、築島裕『東大寺諷誦文稿総索引』（汲古書院、二〇〇一年）による行番号を記した。

【翻刻】

翻字は、築島裕『東大寺諷誦文稿総索引』の本文翻刻に準拠する。但し旧字体・異体字・略字は原則的に現行

の新字体にあらためた。あらためなかつた漢字は、「无」「寶」「玠」「尔」「旦(檀)」「井(菩薩)」である。片仮名の上代特殊仮名遣い甲類のコは「古」、乙類のコは「己」、ア行のエは「衣」、ヤ行のエは「エ」と表記した。

□ 〓 欠損や擦消などにより解読不能の文字

〔 〕 〓 解読困難または解読不能だが、先行書の解読によって挿入する文字

┌ 〓 鈎点

□ 〓 廓(囲み線)で抹消された文字

行頭の数字は、行番号を示す。

○内の算用数字は、本文に引かれた連絡線に付けた番号である。↓は連絡線の始点を、↑は連絡線の終点を示し、①↓ ↑①が一本の連絡線を示す。

【読み下し文】

翻字、記号等は、【翻刻】に準ずる。

『 』 〓 衍字と思われる文字

() 〓 行間に書かれている文句

【文意】

現代語訳を中心にするが、補足や省略をおこなっている。

【解説】

▼原本の状態について。

▽文章の解説。

※単語の羅列であったり、短文のみの箇所には、【解説】や【文意】の項目を立てない場合がある。

【語注】

読み下し文の語句についての注である。行頭の数字は、『東大寺諷誦文稿総索引』による行番号である。

「中田書」は、中田祝夫『東大寺諷誦文稿の国語学的研究』の略。

『総索引』は、築島裕『東大寺諷誦文稿総索引』の略。

本稿は、博士論文「平安初期仏教と文学の研究―『日本霊異記』と『東大寺諷誦文稿』―」付録「東大寺諷誦文稿注釈」に加筆修正したものであり、「東大寺諷誦文稿注釈〔一〕―1行〜40行―」（『成城国文学論集』第三十六輯、二〇一四年三月）の続稿である。

40

某仙之平等大悲文

不尚貴卑云

宿寶王樹云

沙羅樹云

41

悲華經云

若有人於如來所合掌一稱南无當來心成无上尊

42

方廣經云

若人於三寶所不生信世中不值仙生信禮拜常見无量仙

43

日果經云

昔世三寶所有三恭敬心之人又此世作封祿高氏族而為一切人所尊

44

敬者世於三寶所无恭敬之心人又

此世作貧窮下賤之人為一切人所凌蔑

45

摩訶摩耶經云

摩耶夫人

汝長子須臾頃无亂想念惡惟仙汝由多亂想

46

我將行立道生死命受難欺故須臾頃許我靜念思仙

47

此法之時在真實仙念像法之時在有取像名住持三寶此可思真實仙

48

孟蘭王像

此百後天下无仙

油達光童

三道寶階云

曲響云

48 孟園王像 此百後天下礼名
須達光重 三道寶階 云
曲霄仁 云

49 四丘入塔十中作四方四位 云

50 仙乃行 七中 時是離地四寸 然于輪輪相現地上
衆生觸跡七日受樂 仙石迴身時地深八万四千由旬

51 如車輪旋 乞食出城 開城門時 鳴琴作鼓之音 旨龍身一切摩變百瘡 疾 一時甚息

52 敬礼天人 云 敬礼常住三寶 云

53 鸞鳥翔雲必有聖王 紫雲黃雲莫其下必有福德男女 智慧
况乎仙 甚 判法所

54 何災而不滅 何所而不就

55 帝澤宮玉柱 衆生善惡自並現 祇桓寺石鏡 福禍忽現

56 虛空月者矣 十水中十箇月影 現百水中百箇月影 現 然上气 虛空月不增不減 諸

57 仙之身 如來境界 一切衆生心想之中一處元不現 然上气 法身之仙不增不減

55 帝釋宮玉柱衆生善惡自現祇桓寺石鏡福禍忽現

56 虛空月者矣十水中十箇月影現百水中百箇月影現上虛空月不增不減諸

57 仙如來境界之身一切衆生心想之中一處而无不現然法身之他不增不減

58 勝勝夫人云奉提云五百賊云五百釋女云

59 帝釋宮有目陀羅網云

60 生上之生又留世中亦人天无不上家父母之恩

60

生下之生又留世中亦人又无不云乎蒙父母之恩

61

披若此無之良杖 不知三寶乃福田 滅罪生福之至便 不過大衆乃威力是以
今日且至等 至誠敬蒲陀之至 慙憑投大悲海

63

七寶所成之琉璃寶宮 十恒河沙世界遙遠雜 日行十二故 神通寶興望

64

住持之大殿

住持之大殿

渡海踰山 有請發句

山坂之國也

有之有去往是相見談丁大分

不相見話丁大分 元久跡往矣是人又經是年月是 甚等是

67

四乃地乃
 但來又凡
 詩亦文
 虛空難竟
 而回百九
 方二見
 迎來詩大
 地難黃而
 隱身

自他中混雜字

66 65

渡海踰上山坂之國亦毛
 有之有上文往是毛相見談下大分
 不相見話下大分

禱請發句
 无久跡往矣上人又經是上年月
 若爾等出報

自他中混雜字

四乃馳乃追來又八時尔文 虚空難寬而迴首元方二觀迎來時大地難廣而隱身

无數尊已卑 五龍之殘也中七 未晚 愚才 智才 四山之怖未離 春花又 不附

秋枝尔 幼時之紅顏又 不見老髯尔

此身文 盡財而善嚴 都元一益 御出方 頸制會 終受 切德之 自然生善才

所尔文 貧人又 生時被飢寒之禍 命終後尔文 不足一尋官 繞頸此也此

脚穢家穢上云五 插有大鳥之數 引弄 扣虛額 无气摺助人

迨五 及上气 不可及者年月才 乞祈百年年才 年才 誰得其一 任日月之往來 散才

遽才 改又 每畫流夜之明 晦前上 逢才 徐近又

撫育我等之親 親魂今在何所 不聖者不知所死 解才 薄推甘 摩頭至踵 恩重

丘山澤深江海 屈身伴骨 髓而何奉酬 父世之恩 世間財不可酬 出世間上

財之奉刀奉奉酬 彼我等終五 亦之行奉 送出世間之財 我從无娘 竟來所作五

此業會初可世人所穢 應為歸行法而初事 達十德等乃至

84 83 82 81 80 79 78 77 76 75 74
邊千川呂 改又 每晝 一夜之明晦前上 逢上 徐近又

撫育我等之親魂 今在何所 不聖者不知所託 解下 薄推甘 摩頭至踵思重
丘山澤深江海 屈身碎骨隨而何奉酬 父世之恩是 世間財不可酬上 出世間之
財財 奉刀奉奉酬 故我等從五 中中 之行奉 送出世間之財 我從元始先來所作五
此某會初所以世人所讚 應為難行法而初事悉 達十願守乃至
謗法闡提罪 自作教他見隨喜 至慚愧皆中 餽罪除滅永不超

合是 某甲 掃灑三尊福庭 莊嚴四德寶殿 藥師如來 敬心 內法

第一經乘 堪能供具 捧三業之頂 供養藥師如來 講奉 之法會志

看云 大報恩高行 世雄之尊德 魏量 難測大乘之妙曲以 深深 寶

是比世間出世難 難值難聽 无上尊乃 教有 天上天下最勝最尊業 三寶

境界下 是以雪山童子 文是 為八字命施羅刹 薩搖王子文 為喜提身

【翻刻】(41〜49行)

- 41 悲華經云 若有人於如来所 合掌一称南无仏 当来必成无上尊
- 42 方広経云 若人於三寶所不生信世々中不值仏 生信礼拝常見无量仏
- 43 因果経云 昔世三寶所有リシ恭敬心之人ハ 此世作封祿高氏族而為一切人所尊
- 44 敬昔世於三寶所无恭敬之心人ハ 此世作貧窮下賤之人為一切人所凌蔑
- 45 摩訶摩耶経云 礼仏時思念 汝吾ヲ須臾頃无乱想令思惟仏 汝由多乱想
摩耶夫人
- 46 我ヲ将行五道生死令受雜形 故須臾頃許我静令思仏 ⑧↓
- 47 正法之時在真実仏 今像法之時唯有形像是名住持三宝 此可思真実仏
- 48 孟闡王像 毗音 從天下礼仏 須達九重 三道寶階云 曲腰仏云
- 49 四比丘入塔懺悔 作四方四仏云

【読み下し文】(41〜49行)

悲華經ニ云ク、若シ人ノ、如来ノ所ニ於テ、合掌シ南无仏ト一称スルコトアラバ、当来ニ必ず无上尊ト成ラム。方広経ニ云ク、若シ人ノ、三寶ノ所ニ於テ信ヲ生ゼズバ、世々ノ中ニ仏ニ値ヒタテマツラザラム。信ヲ生ジテ礼拝セバ、常ニ无量仏ヲ見ム。

因果経ニ云ク、昔ノ世ニ、三寶ノ所ニシテ恭敬ノ心ノ有リシ人ハ、此ノ世ニシテ封祿ノ高キ氏族ト作リテ、一切ノ人ノ為ニ尊敬セラレ、昔ノ世ニ、三寶ノ所ニ於テ恭敬ノ心ノ无カリシ人ハ、此ノ世ニ貧窮下賤ノ人ト作リテ、

一切ノ人ノ為ニ悽蔑セララル。

摩訶摩耶經ニ云ク、(摩耶夫人ノ) 礼仏シタテマツリシ時ニ思念スラク、汝、吾ヲ須臾ノ頃モ乱想无ク仏ヲ思惟セシメタマヘ。汝、乱想多キニ由リテ、我ヲ五道生死ニ將行キテ、雜形ヲ受ケシメタマヒキ。故ニ、須臾ノ頃許ニ、我ニ靜カニ仏ヲ思ハシメタマヘ。⑧↓

正法ノ時ニハ眞実ノ仏在ス。今、像法ノ時ニハ、唯、形像ノミ有リ。是ヲ住持ノ三寶ト名ヅク。此ニ眞実ノ仏ヲ思フ可シ。

孟闍王ノ像。(毘首ハ天ノ下從リ仏ヲ礼シタテマツル。) 須達ノ九重。三道ノ寶階云。腰ヲ曲ゲテ仏ニ云。四タリノ比丘、塔ニ入りテ懺悔ス。四方四仏ニ作ル云。

【文意】(41〜49行)

悲華經に云く、若し人が、如来のもとで合掌して「南無仏」と一称することがあれば、来世に必ず無上尊として成仏するだろう。

方広経に云く、若し人が、三宝に信を生じなかつたら、輪廻転生する世々の中で仏にお会いすることはないだろう。信を生じて礼拝するならば、常に無量仏を見るだろう。

因果経に云く、昔の世に、三宝に恭敬の心があつた人は、此の世で封祿の高い氏族として生まれて、一切の人々に尊敬される。昔の世に、三宝に恭敬の心がなかつた人は、此の世で貧窮下賤の人として生まれて、一切の人々に軽蔑される。

摩訶摩耶經に云く、(摩耶夫人が) 礼仏したてまつった時に思念したことには、「汝よ、吾を少しの間、乱想なく一心に仏を思惟させたまえ。汝は、私に乱想が多いために、五道の生死輪廻の中に連れてゆき、このような雜形を受けさせなされた。だから、どうか少しの間だけでも、我に静かに仏を思念させたまえ。」⑧ ↓

正法の時には眞実の仏がおいでになった。今、像法の時には、唯、仏の形像だけがあり、是を住持の三寶と名づく。此の形像に眞実の仏を思ふべし。

孟闍王の像。(毘首羯摩は、釈尊が忉利天で母の摩耶夫人のために説法をしているとき、天の下から仏を敬礼したてまつった。) 須達の九重。三道の寶階云。腰を曲げて仏に敬礼する云。

四人の比丘が、塔に入って懺悔をする。四方四仏に作る云。

【解説】(41～49行)

▼41行の前に、3行分程の空白あり。

▽41～46行 經典の引用のかたちで、仏または三寶を礼拝する功德について述べている。『悲華經』『方広經』『因果經』『摩訶摩耶經』を引いているが、管見では經文に同文はみられない。

▽47行 住持三寶について。住持三寶とは、仏滅後も永く保存される三寶(仏像・經卷・僧)。正法・像法・末法の三時説にもとづく。正法は五百年、像法は五百年または千年とされる。

▽48行 釈尊が母摩耶夫人の為に忉利天で説法した時に、地上で優填王らが釈尊を慕って仏像を造ったという仏傳の覺書と思われる。釈尊が天から降りて帰る時に、毘首羯摩が三道の寶階を作り、仏像は立ち上がった、釈

尊をお迎えしたという。164行にもみえる。

▽49行【解説】▽52行で後述するように、藤本誠氏は、『集諸経礼懺悔』の仏名懺悔の法会次第等が『東大寺諷誦文稿』前半部に影響を与えていた可能性を指摘している。そうすると、41〜49行も懺悔の法会で朗読する文章の覚え書きと法会次第で、49行は、四方四仏が安置されている塔内に四人の僧が入り、懺悔や礼仏を行う法会があったことを示しているのかもしれない。

【語注】（41〜49行）

41悲華経 曇無讖訳『悲華経』十卷。経文中に41行の同文は見られない。經典の冒頭で、弥勒菩薩等が座から立ち東南方に向って合掌して「南無蓮華尊」と唱え、蓮華尊仏の成道を讃えた。その場面の取意か。「是等の如き上首の菩薩摩訶薩十千人を俱して、即ち座より起ちて偏に右肩を袒ぎ右膝を地に著き、又手合掌し東南方に向かひ、一心に歎喜し恭敬瞻仰して、是の言を作す。南無蓮華尊多陀阿伽度阿羅呵三藐三仏陀。南無蓮華尊多陀阿伽度阿羅呵三藐三仏陀」（『悲華経』卷第一、転法輪品）。

42方広経 經典名に「方広」を含む經典は『大方広仏華嚴経』『大方広莊嚴経』など複数あるが、42行の引用文が見のため特定できない。『日本靈異記』にも「方広経」「方広經典」が八カ所みられ、大乘經典の総称とする説があるが、中田祝夫氏は説話の内容から懺悔に用いられた經典『大通方広懺悔滅罪莊嚴成仏経（大通方広経）』二卷（著者不明、中国で作成された疑経）である可能性を指摘している。但し、『東大寺諷誦文稿』の引用文はその経文には見当たらなかったことを報告している（『日本靈異記』所引の一仏典―大通方広懺悔滅罪

莊嚴成仏經について―、伊藤博・渡瀬昌也編『石井庄司博士喜寿記念論集上代文学考究』塙書房、一九七八年。しかし、【解説】で述べたように本章段以降は懺悔に関わる記述が多く、また藏本尚徳氏と藤本誠氏は79行「法蘭提ノ罪」に『大通方広経』の影響を指摘しているので（79行【語注】参照）、42行の『方広経』は『大方広経』である可能性が高い。『大通方広経』に、信心と不信の利益不利益を述べる箇所がある。「若し不信・軽谷・不敬の人、則ち此の十二部経を謗り、及び金剛色身を謗り、及び大士殊師利を謗り、及び此の十方の諸仏を謗れば、是の人定めて地獄に墮して無虚なり（下略）」（『大通方広経』巻下）。

43 因果経 釈尊の仏伝を説く『過去現在因果経』四巻に同文はみられない。唐代の疑経『善悪因果経』一卷は、前世の業因によって現世の貧富貴賤美醜があることを説く。同文は見られないが、その取意か。

45 摩訶摩耶経 曇景訳『摩訶摩耶経』二巻。中田書は、經典に同文は見当たらないが、以下の部分に摩耶夫人に乱想が多いという記述があることを指摘している（282頁）。「時摩訶摩耶。即於仏前而自剋責其心意言。汝常何故作非利益。遊六塵境而不安定。乱想牽挽無時暫停。（以下略）」（『摩訶摩耶経』巻上）。また、次の文を挙げている。「尔時、摩訶摩耶。説此偈已而白仏言。世尊。一切衆生在於五道。皆由煩惱過患所致。故有結縛。不得自在。願我来世得成正覺。常斷一切此患根本」（同）。この後に「百千億劫受余雜形」（同）とある。『摩訶摩耶経』巻上は、釈尊が母の摩耶夫人のために忉利天に昇り説法をする内容で、48行に共通する。

45 摩耶夫人 摩訶摩耶。浄飯王の夫人、釈尊の母。釈尊を生んで七日目に亡くなった。

46 五道生死 五道（地獄・餓鬼・畜生・人・天）をめぐる生死輪廻。

46 雜形 五道に生まれる者たちのさまざまな姿かたち。

47 正法ノ時 釈尊入滅後、教えが正しく行われる期間。正法・像法・末法の三時説による。期間には諸説があるが、正法五百年が一般的である。

47 像法ノ時 仏の教え（教）と実践（行）は伝えられているが、さとり（証）が得られない時代。像法五百年説と千年説がある。

47 住持ノ三寶 末世まで保存されるという三宝（仏像・経巻・僧）。仏不在の世にも、住持の三宝は存続するので、礼拝の対象となる。「住持とは、世尊最後に將に般涅槃せんとして、忉利天に於て、安居説法したまふ。優填王等、金容を思仰して、檀を彫りて像と為し、以て供養を為す。仏忉利より方に宝階を下る。檀像起立して、礼拝し迎逆す。世尊摩頂して、像を記して言はく、未來住持して、広く仏事をなせと。」（『大乘法苑義林章』卷第六之本、三宝義林）。「三宝常住にして世を化し、恩徳廣大にして不思議なり。」（『心地観経』卷第三、報恩品）。

48 盂闍王ノ像 優填王。釈尊が忉利天で説法をしている間に、優填王と波斯匿王が、釈尊を慕ってそれぞれ五尺の像を造った。釈尊はこの像に末世の教化を託したという。「優填王即ち牛頭梅檀を以て、如来の形像を作る。高さ五尺なり。（中略）是の時波斯匿王純ら紫磨金を以て、如来の像を作る。高さ五尺なり。爾の時閻浮里内に始めて此の二の如来の形像有り」（『増一阿含経』卷第二十八、聴法品）。

48 毘首 毘首羯摩。妙業、工巧、工巧師、種々工業なども諷す。帝釈天の臣で、建築彫刻等の神。

48 須達 須達多、給孤独長者。中インド舍衛城の長者で、波斯匿王の大臣。常に孤独者を憐れみ、衣食を給施した。仏弟子舍利弗と共に祇園精舎を建立した。55行の「祇桓寺」は祇園精舎の事。264行と276行にも「須達」の

名前がみえる。

48 三道ノ寶階 釈尊が忉利天説法の後、僧伽尸城に降りるときに、毘首羯摩と諸天が釈尊のために作った三列の階段。七宝、または金銀等で作られている。『摩訶摩耶經』(45行)にもみえる。「即ち鬼神をして三道の宝階を作らしむ。中央の階は閻浮檀金を用い、右面の階は純瑠璃を用い、左面の階は純瑪瑙を用い、欄楯は極めて厳麗に彫鏤す」(『摩訶摩耶經』卷上)。「爾の時自在天子、即ち三道の金・銀・水精を化作しぬ。是の時金道は当に中央に在るべし。水精道の側、銀道の側を挟みて金樹を化しぬ」(『増一阿含經』卷第二十八)。

48 腰ヲ曲ゲテ 優填王の仏像は、立ち上がり礼拝して釈尊を迎えたという。165行にも「曲腰像尺云」とある。47行「孟闍王ノ像」語注参照。「如来が天宮自ら還られるや、刻檀の像は起ちて世尊を迎へたり」(『大唐西域記』卷第五)。「伝へ聞く、優填の檀の像起ちて礼み敬ふことを致し、丁蘭の木の母動きて生ける形を示すといふは、其れ斯れを謂ふなり」(『日本靈異記』中卷第三十九縁)。

49 懺悔 42行語注に掲出した『大通方広經』にもとづく懺悔は唐代からおこなわれていた(牧田諦亮『擬經研究』第八章、臨川書店、一九七六年、『牧田諦亮著作集』第一卷所収)。

49 四方四仏 經典により諸説ある。東方は阿闍仏の香積世界、南方は実相仏の歡喜世界、西方は無量仏の安樂世界、北方は微妙声仏の蓮華莊嚴世界など。古代寺院の塔の内部に、四方浄土を安置した作例がある。東大寺東塔院、興福寺五重塔など。

【翻刻】(50～52行)

50 仏ノ行給フ時足離地四寸 然千輻輪相現地上 衆生触跡七日受樂 仏右廻身時地深八万四千由旬

51 如車輪旋 乞食出城 開城門時 鳴琴竹鼓之音 盲聾 一切攣躄百瘡疾一時休息

52 敬礼天人云 敬礼常住三宝云

【読み下し文】（50～52行）

仏ノ行キ給フ時ニハ、足、地ヲ四寸離レタマフ。（然レドモ千輻輪相ハ地上ニ現ル。）衆生、跡ニ触ルレバ七日ノ樂ヲ受ク。仏ノ右ヨリ身ヲ廻ラシタマフ時ニハ、地深キコト八万四千由旬、車輪ノ如クニ旋ル。

乞食シテ城ヲ出デ、城門ヲ開ク時ニハ、琴竹鼓ノ音が鳴ル。盲モ聾モ、一切ノ攣躄モ、百ノ疾モ、一時ニ休息ス。天人ニ敬礼ス云。常住ノ三宝ニ敬礼ス云。

【文意】（50～52行）

仏がお行きになる時には、足が地を四寸お離れになる。（しかし、千輻輪相は地上に現れる。）衆生が足跡に触れると、七日の安樂を受ける。仏が右から身をお廻らせになる時には、大地の深さ八万四千由旬が車輪のように旋る。

仏が乞食して城を出て城門が開く時には、琴や竹鼓の樂の音が鳴り、盲者も聾者も、一切の手足の不自由な者たちも、百人の病者たちも、一齊に安らかに休息する。

天人に敬礼する云。常住の三宝に敬礼する云。

【解説】(50～52行)

▽50行～51行 仏の歩行の瑞相を述べ、仏を讃える章段。『大宝積經』に、仏の身業について次のように説かれ、一致する内容が多い。『往生要集』巻中にも同文が引用されている。「如来は若しは城邑に往き若しは旋り返る時に、双足は空を踏んで、千輻の輪は地の際に現れ、悦意の妙香の鉢特摩花は自然に湧出して如来の足を承け、若し畜生趣の一切の有情の、如来の足に為つて触れらるる者は、極つて七日に満つるまで諸の快樂を受け、命終の後には善趣たる樂世界の中に往生するなり」(『大宝積經』卷第四十、菩薩藏会)。

▽51行 仏伝の出家出城の場面か。悉多太子が出家のために城を出る時、諸天諸菩薩が現れて太子をとりまき、天樂を奏したという仏伝がある。「菩薩の左辺には、欲界の天子、手に幢幡を執り、無数の天樂あり、導引して前行す」(『衆許摩訶帝經』卷第四)。出城の場面に乞食のことが書かれている仏伝は未見。

▽52行 藤本誠氏は、『集諸經札懺義』の供養文の冒頭や如来唄の後に「敬礼常住三宝」とあり、『入唐求法巡礼行記』にもみえることを述べている。これは「六種」(27行章題)の供養と一体化した礼仏で、「奈良時代後期から平安初期における様々な法会で行われた仏を供養するための焼香・散華の次第であ」ったと推測している。また、『東大寺諷誦文稿』は、執筆当初、父母追善の法華八講のために作成された手控えで、「自他懺悔」(67～79行)が追善供養に懺悔過供養が取り込まれたことを示すものであることを指摘している(藤本誠「東大寺諷誦文稿」の成立過程)、『水門―言葉と歴史―』23、二〇一一年七月)。藤本氏の説をふまえると、「自他懺悔混雑言」の章段(67～74行)から「至心慚愧皆懺悔」を述べる75～79行までの章段だけではなく、前章段

(41～49行) とこの章段(50～52行) も懺悔の次第のための詞章であつた可能性がある。

【語注】(50～52行)

50 千輻輪相 仏の三十二相(仏が備えている三十二の特徴)の一つ。仏の足の裏にある、千の輻を持つ車輪のよ
うな紋様。「地上ニ現ル」は、「千輻の輪は地の際に現れ」(『大宝積経』卷第四十)に一致する。

50 地深キコト八万四千由旬 仏教の世界観では、世界の最低に風輪があり、その上に水輪があり、その上に金輪
があり、その上に大地がある。それぞれの深さは諸説ある。由旬はインドの距離の単位。

51 乞食 托鉢。十二頭陀行の一つ。

52 天人 仏堂内の天人像のことか。

52 常住ノ三寶 永劫にとどめられる三宝のこと。47行の「住持三寶」に同じ。

【翻刻】(53～54行)

53 ↑⑧ 鳥鸞鳥勸誦言翔処 必有聖王 紫雲黄雲襲弗下必有福德玉男玉女 況乎某某并仏翔臨所

54 何災而不滅何欣而不就

【読み下し文】(53～54行)

↑⑧ (一) 勸誦言鸞鳥ノ翔ル処ニハ、必ズ聖王有リ。紫雲黄雲ノ襲弗トアル下ニハ、必ズ福德ノ(玉)男、(智慧ノ)

(玉) 女有り。況ヤ(某) 仏(某菩薩)ノ翔り臨ミタマフ所ニハ、何ノ災カ滅セスアラム、何ノ欣ビカ就ラスアラム。

【文意】(53～54行)

勸請の言

↑⑧(鳳) 鸞鳥が飛び翔ける处には必ず聖王がいる。紫雲黄雲がたなびく下には、必ず福德の(玉の) 男と(智慧の) (玉の) 女がいるだろう。いわんや、某仏(某菩薩) が天翔けて降臨される所には、どんな災が滅びないことがあるか。どんな欣びが得られないことがあるか。

【解説】(53～54行)

▽53～54行 標題「勸請言」とある。「勸請」は法会の際に仏菩薩の降臨を願うことで、仏菩薩が現れる時の瑞兆を讃嘆する本文の内容と一致する。「某仏(某菩薩)」として諸仏諸菩薩の勸請に汎用できるようにしている。藤本誠氏によると、『礼懺儀』の式次第では「懺悔」の後に「勸請」がある(【解説】▽52行藤本論文参照)。65行には「勸請発句」とある(【解説】▽65～66行参照)。

【語注】(53～54行)

53 鳳 鳳凰。聖天子が現れるときに出現するといわれる。

53 鸞鳥 鳳凰の一種。

53 紫雲黄雲 瑞雲。盛徳の君子や聖人のいるところにたなびくといわれる。「産るる時に当りて紫雲有り、其の
家の上に見れき」あらは（『日本三代実録』貞観六年正月十四日、円仁卒伝）。

【翻刻】（55行）

55 帝釈宮玉柱衆生善悪自然現 祇桓寺石鏡福禍忽現

【読み下し文】（55行）

（止）帝釈宮ノ玉ノ柱ニハ、衆生ノ善悪ガ自然ニ現レ、祇桓寺ノ石ノ鏡ニハ福禍ガ忽ニ現ル。

【解説】（55行）

▼55行の前に2行分程の空白あり。

▽55行「止」は、抹消の意。帝釈宮の柱と祇園精舎の鏡のことを述べている。感応道交（1～6行、56～59行）の例示である。

【語注】（55行）

55 帝釈宮ノ玉ノ柱 帝釈宮は、帝釈天の住処。須弥山の頂上の忉利天にある。その中に三十三天が集まる善法堂

があり、堂内に巨大な柱がある。「其の堂の中の柱は、囲り十由旬、高さ百由旬なり。其の柱の下に当りて、天帝の座を敷く」(『仏説長阿含經』卷第二十)。

55 祇桓寺 祇園精舎。舎衛城の南にある僧園、釈尊説法の遺跡。須達が建立した(48行「須達」語注参照)。石鏡については未見。

【翻刻】(56～59行)

56 虚空月者矣十水中十箇月影現百水中百箇月影現然トモ虚空月不増不減諸

57 仏之身如來法界一切衆生心想之中一処而无不現 然トモ法身之仏不増不減

58 勝鬘夫人云 韋提云 五百賊云 五百釈女云

59 帝釈宮有因陀羅網云

【読み下し文】(56～59行)

虚空ノ月ハ、十水ノ中ニ八十箇ノ月影トシテ(現ル)。百水ノ中ニ八百箇ノ月影トシテ現ル。然レドモ虚空ノ月ハ増サズ、減ラズ。諸仏(如来ノ法界ノ)身ハ、一切衆生ノ心想ノ中ニ一処トシテ現レズトイフコト无シ。然レドモ、法身ノ仏ハ増サズ、減ラズ。

勝鬘夫人云。韋提云。五百ノ賊云。五百ノ釈女云。

帝釈宮ニ因陀羅網有リ云。

【文意】（56～59行）

虚空の月は、十水の中に十箇の月影として（現れる。）百水の中には百箇の月影として現れる。しかし、虚空の月は増えもせず、減りもしない。それと同じように、諸仏（如来の法界）の身は、一切衆生の心想の中に一処として現れないということはない。然し、法身の仏は増えることがなく、減ることもない。

勝鬘夫人云。韋提云。五百の賊云。五百の釈女云。

帝釈宮に因陀羅網がある云。

【解説】（56～59行）

▼56行の前に2行分程の空白あり。

▽56～57行 仏と衆生の感応道交の水月の喩え。3行にも類似の表現がみられる。ここでは、仏の三身のうちの法身を月に喩えている。天台宗教義書の『法華玄義』に基づくとと思われる。拙稿「水の中の月―東大寺諷誦

文稿』における天台教学の受容―（『成城国文学論集』第三十五集、二〇一三年三月）参照。

▽58行 波斯匿王の伝説についての覚え書きであろう。

【語注】（56～59行）

57（如来ノ法界ノ）身 法界は真理の世界。真理を身体としている仏のこと。法身に同じ。法身は仏の三身の一。

57 法身 法界ノ身に同じ。「彼の文に云はく、「仏の真法身は猶ほ虚空の如し、物に応じて形を現すること水中の月の如し」と、報身は即ち天月なり」（『法華玄義』卷第五下）「法身清浄にして染無きこと虚空の如く、湛然として一切に応ず。思無く念無くして、機に随つて即ち対す。一月降らず、百水升のほらずして、河の短長に随ひ、河の規矩に任せて、前無く後無く一時に普く現ずるが如し」（同、卷第六上）。

58 勝鬘夫人 音訳では末利夫人。波斯匿王の第一夫人、毘流離王の母。迦毘羅衛国の村邑の知事の娘。波斯匿王とともに仏を信奉した。一説に、婢の娘とも（58行「五百ノ釈女」語注参照）。

58 韋提 韋提希。頻婆娑羅王の妃、阿闍世王の母。一説に、波斯匿王の妹。

58 五百ノ賊 波斯匿王の伝説か。波斯匿王が五百人の賊を捉えて眼をえぐつたが、賊らは仏に祈り元通りの眼を与えられて救われたという伝説がある。「復次に善男子、憍薩羅国に、諸の群賊あり。その数五百なり。軍当抄劫して、害を為すことはなはだ滋甚し。波斯匿王、その縦暴を患ひ、兵を遣はして伺ひ捕ふ。得已りて目を挑り、遂に黒闇叢林の下に著す」（北本『涅槃経』卷第十六、梵行品）。「大王、舍婆提国に群賊五百あり。波斯匿王、

その目を挑出す」（同、卷第十九、梵行品）。

58 五百ノ釈女 釈女は、釈迦族の女性。毘流離王の伝説か。波斯匿王が迦毘羅衛国に釈迦族の女を求めた時、偽つて婢の娘である勝鬘を与え、波斯匿王は第一夫人とした。その息子毘流離王は、母が婢の女であったことを侮辱されて釈迦族を怨み、迦毘羅衛国を滅ぼした。五百人の釈女を婦に選び取つたが、拒絶され侮辱されたことに怒り、惨殺した。しかし、釈尊は五百人の釈女のために法を説き、釈女たちは天上に生まれかわることができた。「時に王瞋いか悲り、尽く五百の釈女を取りて、其の手足を切り、深き坑の中に著す」（『増一阿含経』卷第

二十六)。「軍を還せるの側に卒堵婆有り。是れ釈女が戮せられし所なり」(『大唐西域記』卷第六、室羅伐悉底国)。

59 因陀羅網 帝釈天宮に張りめぐらされている網。結び目の一つ一つに珠玉が結び付けられ、互いに無限に映じ合う。『華嚴経』に説かれている。「因陀羅網 因陀羅此云帝也。帝謂帝釈也。網謂帝釈大衛殿上結珠之網。其網孔相更為中表圍遶平作。主伴同時成就圍遶相應也」(『新訳華嚴経音義私記』下卷)。

【翻刻】(60行)

60 生トシ生ヌル世中二人ハ、无不ト云事蒙父母之恩

【読み下し文】(60行)

世ノ中ニ生キトシ生キヌル人ハ、父母ノ恩ヲ蒙ラズトイフコト无シ。

【解説】(60行)

▼60行の前に、五行分程度の空白有り。

▽父母の恩について述べる。

【語注】(60行)

60 生トシ生ヌル人ハ 助詞「シ」が「ト」についた例である。25行「有リシ」語注参照。

【翻刻】(61～62行)

61 〔抜苦〕与楽ノ良扶 不如三寶ノ福田 滅罪生福之至便 不過大乘ノ威力 是以
62 今日且主等 至誠帰補陀之主 愍憑投大悲海

【読み下し文】(61～62行)

〔抜苦〕与楽ノ良キ扶ケハ、三寶ノ福田ニ如カズ。滅罪生福ノ至便ハ、大乘ノ威力ニ過ギズ。是ヲ以テ、今日、且主等、至誠ヲモテ補陀ノ主ニ帰シ、愍ニ大悲海ニ憑投ス。

【文意】(61～62行)

苦を抜いて楽を与えてくださる有り難い助けは、三宝の福田にまさるものはない。罪を滅ぼし福を生むために至便なもの、大乘の威力に過ぎるものはない。是を以て、今日、檀主等は、至誠をもって補陀落浄土の主である観音菩薩に帰依し、愍ろに大悲の海に身を投じる。

【解説】(61～62行)

▼61行の前に、六行分程度の空白有り。

▽61～62行 観音菩薩に檀主等の帰依を誓う文。この後63～64行には薬師如来を讃える文がある。53行に「某仏・某菩薩」とあり、53～54行が種々の仏菩薩の法会に対応できる勧請の文句となっているが、61～62行・63～64行は、薬師如来や観音菩薩の法会の場合に組み合わせ使用する文句としてここに書きとめられているとも考えられる。

【語注】（61～62行）

62補陀ノ主 原文「浦陀」。補陀落世界は観世音菩薩の浄土で、観音菩薩のこと。

【翻刻】（63～64行）

63 七寶所成之琉璃寶宮 十恒河沙世界遙遠雖 因行十二故 神通寶輿望

64 住持之大殿

【読み下し文】（63～64行）

七寶ノ成ズル所ノ琉璃ノ寶宮。十恒河沙ノ世界ハ遙遠ナリト雖モ、因行十二ノ故ニ、宝輿ヲ神通シ、住持ノ大殿ヲ望ム。

【文意】（63～64行）

七宝によって作り上げられた薬師如来の琉璃の宝宮。十恒河沙の彼方にある浄瑠璃浄土の世界は遙遠であるといえども、薬師如来の修行による十二の大願のために、神通力によって薬師如来の玉の輿にまみえ、住持の大殿を望み見ることができるといえる。

【解説】（63～64行）

▼63行の前に、一行分程の空白有り。

▽63～64行 薬師如来の浄瑠璃浄土を拝することについて。【解説】▽61～62行参照。

【語注】（63～64行）

63七寶 薬師如来の宮殿は七宝できているという。「然も彼の仏土は一向清浄にして女人有ること無く、亦悪趣及び苦の音声もなく、瑠璃を地と為し、金繩をもて道を界ひ、城闕宮閣・軒窓・羅網、皆七宝をもて成ぜり」〔薬師瑠璃光如来本願功德経〕。

63瑠璃寶宮 薬師如来の住む浄瑠璃浄土の宮殿。

63十恒河沙ノ世界 恒河沙は、ガンジス河（恒河）の砂のように多いという意。浄瑠璃浄土は東方に十恒河沙の世界を過ぎたところにあるという。「東方に此より去ること十恒河沙等の仏土を過ぎて、世界有り、浄瑠璃と名づく」〔薬師瑠璃光如来本願功德経〕。

63因行十二 薬師如来が立てた十二の大願。「曼殊室利よ、彼の仏世尊、薬師瑠璃光如来、本、菩薩の道を行ぜ

し時、十二の大願を發し、諸の有情をして求むる所をば皆得せしめたり」(『薬師瑠璃光如来本願功德經』)。
64住持ノ大殿 薬師如来の宮殿。

【翻刻】(65～66行)

65 勸請発句

66 渡り海^{古エ}踰ル山坂之国ニモ 有シ有レハ往^テモ相見談^{カタラ}ヒツ

无ク跡モ往分ヌル人ハ経^テモ年月ヲ
不相見話^{カタラフ} 為某等悲形

【読み下し文】(65～66行)

勸請発句

海ヲ渡リ山坂ヲ踰^{古エ}ル国ニモ、有リシ有レバ、往キテモ相見談^{カタラ}ヒツベシ。

跡モ无ク往キ分カレヌル人ハ年月ヲ経^テモ相見^{カタラ}テ語^フ可カラズ。某等ノ(悲形ノ)為ニ。

【文意】(65～66行)

勸請発句

海を渡り、山坂を越えて遠く離れた国にも、生きている人ならば会いに行き共に語らうことができる。跡もなく往き失せて別れた人には、どんなに年月をかけても再び会って語らうことはできない。(某等の姿形を失ってしまったために。)

【解説】（65～66行）

▼65行の前に八行分程度の空白あり。

▽65～66行 標題原文「勸請友句」（影印参照）。中田書では「勸請散句」とするが『総索引』では「勸請發句」と翻刻する。内容は勸請の直接の言葉ではなく、死の永遠の別れについて。勸請の前に用いる詞章という意味と考え、「發句」としておく。遠く離れていても生きている人とは再開できるが、亡くなった人とは二度と会えないという文脈は、25～26行の内容に類似する。

【語注】（65～66行）

66 海ヲ渡リ 海・山という順序について、中田書は「和語の熟合の順序によっているものではないかと思う。」
（258頁）とする。

66 躰ル^{古五} 「古」は「コ」の甲類の仮名。『東大寺諷誦文稿』には、66・98・175・294行の四例がある。

66 有リトシ有レバ 原文「有シ」。『総索引』讀下し文により、「有リトシ」と訓む。25行語注参照。

66 談ヒツ 『東大寺諷誦文稿』では、「談」「話」をカタラフと訓んでいる。105行、145行参照。

66 悲形 非形（形なきもの）のことか。

【翻刻】（67～74行）

67 四ノ蛇ノ迫来自他穢悔混雜言スル時ニハ、虚空雖寛而廻首无方、二鼠迎来時大地雖広而隱身

68 无処、尊モ卑モ、五龍之残ヤフレ未脱、愚モ智モ、四山之怖未離、春花ハ不附

69 秋枝ニ、幼時之紅顔ハ、不見老体ニ

70 此身ハ尽財而着嚴トモ都无一益モ、⑨↓掣ツカマヘ頸掣胸、修テハ功德ヲシ、自然生善キ

71 所ニハ⑩↓、貧人ハ生時被飢寒之恥、命終後ニハ、不足一尋葛繞頸、此ヤ此ノ

72 郷穢家穢ト云テ、指有犬鳥之藪引弃、扣虚額无乞誓助人

73 ↑⑩追テ反トモ不可反者年月ナリ、乞祈百年千年モカト誰得其一ヲモ↑⑨任日月之往来、形体モ

74 遷ウツロ改ヌ、毎昼ヒル夜之明晦前ユクサ塗モ徐近ヌ

【読み下し文】(67〜74行)

自他穢悔、雜言ヲ混フ

四ノ蛇ノ迫り来リヌル時ニハ、虚空寛シト雖モ、首ヲ廻スニ方无シ。二ノ鼠ノ迎へ来リヌル時ニハ、大地広シト雖ドモ身ヲ隱スニ処无シ。尊キモ卑シキモ、五龍ノ残レヲ脱レズ。愚モ智モ、四山ノ怖レヲ離レズ。

春ノ花ハ秋ノ枝ニ附カズ。幼時ノ紅顔ハ老体ニ見エズ。

此ノ身ハ財ヲ尽シテ着敵レドモ、都テ一ノ益モ无シ。⑨↓頸ヲ掣マヘ胸ヲ掣マヘ、功德ヲシ修シテハ、自然ニ善

キ所ニハ生レム。⑩↓

貧シキ人ハ生ケル時ニハ、飢寒ノ恥ヲ被フリ、命終ノ後ニハ、一尋ニ足ラヌ葛ヲ頸ニ繞フ。此レヤ此ノ、郷ノ穢、家ノ穢ト云ヒテ、犬鳥有ル藪ヲ指シテ引キ弃ツ。

虚^{イッハ}リテ額ヲ扣キテ乞ヒ誓^メドモ、助クル人无シ。

↑⑩追ヒテ反セドモ、反ス可カラザルハ年月ナリ。百年千年モガト乞ヒ祈^ノメドモ、誰カ其ノ一ヲモ得ム。

↑⑨日月ノ往来スルニ任^{ママ}ニ、形体モ遷^{ウツロ}ヒ改リヌ。昼^{ヒル}夜ノ明ケ晦^クルル毎ニ、前^{ユクサキミチ}ノ塗モ徐ク近ヅキヌ。

【文意】(67～74行)

自他後悔 雜言を混える

四匹の蛇が迫り来る時には、虚空は寛いといえども、首を廻らす場所もない。二匹の鼠が迎えに来る時には、大地は広いといえども身を隠す処もない。尊い人も卑しい人も、五龍の残^{やぶ}れを脱れられない。愚かな人も智慧のある人も、四山の怖れを離れられない。春の花は秋の枝に附かず、幼時の紅顔は老体に見ることはない。

此の身は財を尽して着崩しても、まったく一つの利益もない。⑨↓頸^{ツカ}を掣^{ツカ}まえ胸を掣^{ツカ}まえて、功德を修めることがあれば、来世には自然に善所に生まれ変わるだろう。⑩↓

貧しい人は生きている時には飢えて寒^こえるという恥を受け、亡くなった後には、一尋にも足りない葛が頸を繞るだけである。こいつめ、郷の穢^けれだ、家の穢^けれだと云われて、遺体は犬や鳥のいる藪の方に引き捨てられるのである。

虚^{いっわ}りの気持ちで額を地に叩いて乞い祈つても、助ける人はいない。

↑⑩追つて反そうとしても、反すことができないのは年月である。百年、千年もと乞い祈るけれども、誰^がが其の一も得ることが出来ようか。

↑⑨日月が往来するのにしたがつて、形体も移ろい変わっていく。昼夜の開けて暮れるたびに、来世は少しず

つ近づいてくる。

【解説】（67～74行）

▽67～74行 標題「自他懺悔混雜言」からすると、懺悔の次第に関わる章段（【解説】▽52行参照）。しかし文章の内容は直接懺悔の言葉ではなく、「どんな者でも死を免れることはできない」と、無常を説いている。懺悔の前後に「雜言」として述べる文章か。

【語注】（67～74行）

67四ノ蛇 四大を蛇に譬えた表現で仏典に散見し、奈良時代の文献にも使用されている。四大は、身体を構成する四つの元素で、地・水・火・風。「身を井中に潜むれば、黑白の二鼠有りて互に樹根を齧る。井の四辺には四の毒蛇有り。（中略）其の四毒蛇は四大を喩ふ」（『仏説譬喩經』）。「二鼠競ひ走りて、度目の鳥は旦に飛び、四蛇争ひ侵して、過隙の駒は夕に走る」（『萬葉集』卷第五、山上憶良「日本挽歌」前の詩文）「四つの蛇五つのものの集まれる穢なき身をば厭ひ捨つべし離れ捨つべし」（仏足石歌碑）。

67二ノ鼠 仏典で昼と夜を白と黒の鼠に譬え、無常を説く表現。前項参照。

68五龍ノ残レ 五蘊を喩えている。五蘊は、我々の存在の五つの構成要素、行・受・想・行・識。前々項引用の仏足石歌「五つのもの」が相当する。

69四山 生老病死の四苦を山に譬えていう仏典語。

70 掣^{ツカ}マへ 「掣」は、ひかえる、おさえる、自由に行動させないこと。昭和十四年複製付録の山田孝雄の解題に「掣

ツカマへ稀^{ツカ}タマなどを見ては今の俗語の如何に古き源を有するかをさとりうべく」（『典籍雜攷』宝文館、一九五六年所収）とある。

70 功德ヲシ 「功德ヲシ」とあり、助詞「ヲ」に助詞「シ」が付いた例。25行【語注】参照。

71 飢寒ノ恥 仏典語で「恥」は、慙愧。罪を恥じること。山上憶良の「貧窮問答歌」短歌に、世間を「やさし（恥

ずかしい）」と表現している。「世間を憂^{よのなか}しとやさしと思へども飛び立ちかねつ鳥にしあらねば」（『萬葉集』巻

第五、八九三、「貧窮問答歌一首并短歌」）。

71 葛 ぐず。マメ科のつる性多年草。遺体を、一尋に足りない葛のつるが首をひとめぐりする。あるいは、葛の

織維で織った粗末な衣が首を覆うだけであるという意か。「紙の袍^{きぬ}・葛の襜^{ころも}二つの肩を蔽^{かく}さず」（『三教指帰』

巻下）。

71 此ヤ此ノ 「ヤ」は、間投助詞。

72 虚リテ 傍訓「イツ」。「イツハリ」は「妄^{イツ}欺^{アサ}」（妄^{イツ}ハリ欺^{アサ}キ）（194行）にも見られる。「いつはる」は、

事実や本心を隠して、違うことを言ったりしたりすること。

72 乞ヒ誓メドモ 「こひのむ」という複合動詞が『萬葉集』に散見する。73行「乞祈」も「乞ヒ祈メドモ」と訓

むのであるう。「こふ」「のむ」ともに祈り願う意だが、「のむ」はひれ伏すなどの行為が主体になる。「天つ神

仰ぎ許^{こひのみ}比乃美伏^{ひのみ}してぬかつき」（『萬葉集』巻第五、九〇四、山上憶良「恋男子古日歌三首」）。

73 モガト 「もが」は、実現困難な願望をあらわす。『東大寺諷誦文稿』中の使用例はこの一例のみ。「しつたま

き数にもあらぬ身にはあれど千年にもがと思ほゆるかも」(『萬葉集』卷第五、九〇三、山上憶良「老身重病、経年辛苦、及思見等歌七首」)。

74 遷^{ウツ}ロヒ改マリヌ 盛んだったものがだんだん衰え形を変えていくこと。「うつろふ」は大伴家持の歌に無常の

表現として頻用されている。「紅の 色も宇都呂比 行く水の 止まらぬごとく 常もなく 宇都呂布見者」^{うつろふみれば}

〔『萬葉集』卷第十九、四一六〇、大伴家持「悲世間無常歌一首并短歌」〕。315行にも「遷^{ウツ}ツロ改ヌ」とある。

74 昼夜^{ヒルヨル} 中田書に「漢文では「昼夜」であるが、国語では「ヨルヒル」と順序が逆である」(225頁)とある。

74 前ノ塗^{ユクサキ} 「ユクサ」の傍訓があるので、「前世」ではなく、これから行く先である来世のこと。

【翻刻】(75〜79行)

75 撫育^{ヌイク}我等ヲ親魂 今在何所 不聖不知所在^① ↓解ヌキ薄推甘 摩頭至踵恩重

76 丘山 沢^チ深江海 屈身碎骨髓而何奉酬[↑] 父母之恩^テ以世間財^ヲ不可酬^上 以己^ニ出世間之

77 財^ヲ奉^ラメ奉酬 故我等修^テ懺悔之行 奉^ム送出世間之財 我從无始生死来 所作五

78 此某会初所以世人穢塵^由勞為難行法而初事^ヲワサナリ 逆十惡等乃至

79 謗法闡提罪 自作教他見随喜 至心慚愧皆懺悔 願罪除滅永不起

【読み下し文】(75〜79行)

我等ヲ撫育シタマヒシ親ノ魂ハ、今、何ノ所ニカ在ス。

聖ニアラネバ、在ス所ヲ知ラズ。①↓薄キヲ解^スキ、甘キヲ推シ、頭ヨリ踵ニ至ルマデ摩デタマヒシ恩ハ、丘山ヨリモ重ク、沢（仁）ハ江海ヨリモ深シ。身ヲ屈メ骨髓ヲ碎クトモ何ニシテカ酬イ奉ラム。↑①父母ノ恩ハ世間ノ財ヲ以テハ酬イタテマツル可カラズ。出世間ノ財ヲ以テ己ソ酬イ奉ラム『奉』。故ニ、我等ハ懺悔ノ行ヲ修シテ、出世間ノ財ヲ送り奉ラム。我无始生死従^{コノカ}リ来タ、作ル所ノ五逆十惡等、乃至謗法闡提罪。自作教他シテ随喜^ラセ見レ、至心ニ慚愧シ、皆懺悔ス。願ハクハ罪ヲ除滅シテ永ク起サズアラシメタマヘ。

此ノ某会ハ、世人ノ塵勞ニ穢サルルガ所以ニ（ニ由リテ）初メキ。行法シ難カリシガ為ニシテ、初メシ事ナリ。^{ワサ}

【文意】

私たちを撫で慈しみ育てて下さった親の魂は、今、何処においてになるのか。

私は神通力のある聖ではないので、親のおいでになる所を知らない。

①↓薄い着物を脱いで私たちに着せかけ、甘い物を勧めてくださり、頭から踵まで撫でて下さった父母の恩は丘山よりも重く、仁は江海よりも深い。その恩に、身を屈めて骨髓を砕いても、どうやって報い奉ることができようか。↑①

父母の恩はこの俗世間の財をもっては報い奉ることができない。出世間の財をもってこそ、報い奉れるだろう。そのために、私たちは懺悔の行を修して、父母に出世間の財をお送り奉ろう。

私は生死が始まってよりこのかた、五逆十惡等の重罪や謗法闡提罪を作り続けて来た。この懺悔の行を自ら作り他に教え、随喜せられ、至心に慚愧して、すべてを懺悔する。願わくは罪が除滅して、永く罪を作らないよう

にしたまえ。

此の某会は、世の人が煩惱や罪の塵勞に穢されているために初めた。行法をおこない難いために、初めた行事である。

【解説】（75～79行）

▼75行の前に2行分程の空白あり。

▽75～79行 亡き親の魂の所在についての問答。魂の所在の問に対して、自分は（神通力のある）聖ではないの
で知らないと答えている。その後、父母の恩について述べ、追善報恩の行としての懺悔滅罪の言葉を述べる。
廓で囲んだ78行には、「某会」を始めた由来を述べる。

【語注】（75～79行）

75 聖ナラネバ、在ス所ヲ知ラズ 聖の持つ六種の神通力のうち、天眼通は死後の世界も見通せる能力。亡き両親
の在所を知る神通力の伝説として、仏の弟子目連が六神通を得て、亡き母が生まれ変わった世界を見てみたこ
ころ、餓鬼道に墮して苦しんでいることを知ったという、盂蘭盆会の起源伝説が有名。

75 薄ヲ解キ、甘キヲ推シ 漢語「推解」は、人に衣食を与え、恩恵を施すこと。

76 丘山ヨリモ重ク、沢（仁）ハ江海ヨリモ深シ。「慈父恩高如山王 悲母恩深如大海」（『心地観経』卷第三、
報恩品）。

77 出世間ノ財 仏道の功德のこと。

77 无始生死従リ来タコノカ その起源もわからない生死輪廻が始まってからずっと今まで。

77 五逆十悪 最も重い五つの逆罪（母を殺す・父を殺す・聖者を殺す・仏の血を流す・教団の和合を破る）と、

十悪（殺生・偷盗・邪淫・妄語・綺語・悪口・両舌・貪欲・瞋恚・愚癡）。

78 事ナリワサ 「事ワサナリ」。『東大寺諷誦文稿』では、「事」をほかに、「事々に」（121行）、「頃日ノ事シワサヲ」（208行）、「事ワサ」

シワサ云々」（209行）と訓んでいる。

79 謗法闡提ノ罪 謗法闡提は、仏法を誹謗して否定し、成仏の因をもたない者のこと。二種闡提の一つ。『大通

方広経』は一闡提という重罪も三宝の礼拝称名の懺悔によって救済されることを論じている（倉本尚徳「『大

通方広経』の懺悔思想―特に『涅槃経』との関係について」『東方学』第百十七輯、二〇〇九年、藤本誠「『東

大寺諷誦文稿』の成立過程―前半部を中心として」『水門―言葉と歴史』23、二〇一一年七月）。『大通方広

経』は【語注】42行参照。

本稿は、成城大学芸学部特別研究助成「平安初期における仏教法会と『東大寺諷誦文稿』の研究」の成果である。